

がんの 教室

田中 伸哉

⑪

分子標的薬とは

抗がん剤として、化学療法薬、ホルモン療法薬などがあることは既に書いた。今回はさらに進んだ分子標的薬について。
この新薬は2001年に白血病の治療薬として登場し、今では乳がん、大腸がん、胃がん、肺がん、腎がんに対するものが続々と開発されている。では分子標的薬は、化

学療法とどう違うのか。

化学療法は、がんだけではなく、髪の毛などを作る正常な細胞も全て標的となるから、副作用も強い。一方分子標的薬は、

分子標的薬には①分子

量が大きい抗体医薬品と、②分子量がその数百分の一ほど小さい低分子化合物がある。①は主に乳がん、悪性リンパ腫、

大腸がんなどに使われ、がんの原因分子に抱きついて働きを止める。②は肺がん、大腸がん、白血病などに使われ、がんの原因分子の急所を攻撃す

る。

先日、40代の肺がんが全身に転移した末期の女性患者が分子標的薬を受け、見事に全身のがんは消え去った。

急所狙い撃ち 末期にも有効

増殖するがん細胞や、がん細胞の増殖を助ける血管を狙い撃ちにする。手足症候群という皮膚がただれる副作用もあるが、化学療法薬に比べるとかなり低い。
化学療法薬が、広範囲を標的にして正常な細胞も巻き添えにするのであれば、分子標的薬はスナイパーのようにがん細胞を狙い撃ちする。



以前は末期がんを治療することは不可能だったが、分子標的薬でがんが体から一時消滅するケースも珍しくない。この女性是非喫煙で、分子標的薬の対象になりやすいという要素も幸いした。

しかし課題もある。分子標的薬も化学療法薬と同様に、1〜2年の間に再発する可能性が少なからずあるのだ。今後は、この再発を止める研究の発展が期待されている。

(北大医学部腫瘍病理学教授)